

・労働者党の誇りは未来を示すこと、そして、労働者階級は革命的である

1865年2月18日 マルクスからエンゲルスへの手紙

「団結は、そこから成長する労働組合とともに、ブルジョアジーとの闘争のための労働者階級の組織の手段として極度の重要性をもっているだけでなく——この重要性は、なかならず、合衆国の労働者でさえ、選挙権と共和制とがあるにもかかわらず、それを欠くことはできないということに現れている——、プロイセンおよび全ドイツにおいては団結権はさらに警察支配や官僚制度の打破であり、僕婢条例や農村における貴族経営を粉碎し、要するに、それは、『臣民』が成人になるための方策であり、この方策は、進歩党でも、すなわちプロイセンにおけるどのブルジョア的野党でも、気が違ってないかぎり、プロイセン政府よりも、ましてやビスマルクごときの政府よりも、百倍も早く承認できるはずのものなのです！これに反して、他方では、王国プロイセン政府の協同組合援助は——そしてプロイセンの事情を知っているひとならばだれでもはじめから必然的な矮小規模をも知っているでしょう——経済的方策としてはゼロですが、同時にこれによって後見制度が拡大され、労働者階級の一部が買収され、運動が無力化されるのです。……、労働者党も、もしビスマルク時代とか他のなんらかのプロイセン時代によって王様の恩寵のおかげで金のリングが自分の口にくっついてこると思い込むならば、もっとずっとひどい物笑いの種になるでしょう。プロイセン政府の社会主義的干渉というラサールのいまわしい幻想にたいする幻滅が現われるであろうということは、少しも疑問の余地がありません。事物の論理がものを言うでしょう。しかし、労働者党の誇りは、このような妄想の空虚さが経験によってはじけるより前に、そのような妄想を退ける、ということを要求しています。労働者階級は革命的なのであり、そうでなければそれはなにものでもないのです。」